

研究ノート

JBBP・バイリンガル・バイカルチュラル学校の考察

— サンフランシスコ市の場合 —

酒井玲子

目次

- I. 研究にあたって
 - II. JBBP とは何か
 - 1) 成り立ち
 - 2) 学校の概観・方針
 - III. 幼・小学校の教育課程
 - 1) キンダーガルテンのプログラム
 - 2) 小学校のプログラム (Grade One)
 - IV. 保護者, 地域, 参加型の教育
 - V. 多文化教育と課題
- さいごに — 研究の方向 —

I. 研究にあたって

日本にはインターナショナルスクールをはじめ韓国, 朝鮮, ブラジルなどの外国人学校が増えている。いずれも学校教育法第1条校の枠外の学校で, いわゆる無認可のフリースクールの位置付けである。しかし近年, 多様な教育要求を反映して「教育特区」の指定制度ができ, ユニークで実績のある学校に対しては認可の措置がとられてきている。

本研究の対象は, 米国サンフランシスコ市立の日本語と英語の両国語と両文化, つまりバイリンガル・バイカルチュラルの学校, (JBBP=Japanese Bilingual-Bicultural Program) である。これは世界各地にある文

部科学省傘下の日本人学校ではない。それに類した学校はここでは「サンフランシスコ日本語補習校」で土曜日のみ開校している。

JBBP は米国の公立校であって, 国際都市サンフランシスコに相応しい多言語・多文化の学校である。

今日, わが国でもオルタナティブの多様な学校の認可要請はいっそう進むという観点から JBBP の調査の必要性を考え, 研究の課題とした。

II. JBBP とは何か

1) 成り立ち

この学校の成立史としては“Japanese Bilingual Bicultural Program Emerson School 1974”と Gaila Uehara / Aileen Mizokami (Kinji Kubota 和訳) “JAPANESE BILINGUAL BICULTURAL PROGRAM” 1978 の2資料からみたい。

1969年に米国日本語会話協会 (Japanese Speaking Society of America) がサンフランシスコ市当局に日本語併用教育課程の学校設立を要請した。しかしそれは却下され, 以後, 再三この請願要請運動を展開してきた。却下の理由はとしては日本人コミュニティ (Japanese Community Services) のサポート

を付帯する、という条件付であったという。

コミュニティーとしての確認事項は、第1に、日本人(日系人)児童の教育実態の把握であり、第2に、同胞の子弟に日本語と英語の両国語・両文化を教えるハイレベルの学校の設置、ということであった。

この請願運動の中心的な担い手たちは、第2次世界大戦中に敵国人として収監された日系人であり、彼らはその苦渋の経験を通して両語・両文化の習得や交流を痛感したのである。

その後、学校設立に関する市の要請に応じてコミュニティーの支持を付帯し、教育委員会への再三の請願運動を経て、1973年に学校として認可されたのである。苦節33年の歴史である。しかし、初年度はキンダーガルテンと小学校2年までの課程であった。

この認可の背景には3年前のラウ法の承認判決(The Lau vs. Nichols Federal Court consent Decree)⁽¹⁾、すなわち最高裁の判決は英語力に困難を抱える児童が公立学校で妥当な教育を受ける機会が与えられる事、もし与えられなければ1964年制定の政令601条に抵触することが明記されているのであった。

公民権法の成立はこの学校の設立に幸したといえる。

つまりJBBPの設立は全米的に公立学校において、バイリンガルプログラムを(スペイン語、中国語、韓国語、フィリピン語等)実施する一環なのであった。

この学校がスタートした時点では、サンフランシスコ市の公立学校内での授業であったのだが、紆余曲折をへて、2003年に現在の場所に独立校舎が建てられたのである。

その間、1978年にはANZA小学校にキンダーガルテンと小学校5年生までの各1教室が設置され、2校目のSHERMAN小学校にはキンダーガルテンから4年生まで、PRESIDIO中学校に6、7年生各1クラスが設置されるという、段階的な発展をみている。

2) 学校の概観・方針

学校案内のパンフレット“Teaching language Through Culture & Community”には、「本校では、英語による確立されたカリキュラムのほか、日本語とその文化を学び、広い視野をもって、生涯教育の礎となり得る多様な教育基盤を形成することをその使命と考えている」とある。

この学校の構成は22名のスタッフ中、日本での教職経験をもつ3名のスタッフとカリフォルニアの教員免許状取得のアメリカ人校長と教員、そして、総数約180名の生徒がおり、それは、キンダーガルテンと1、2年生が各2クラスに分れている。

1クラスの生徒数は約20名。3年から5年までは各1クラスで、各20、22、18名である。このうちキンダーガルテンでは英語を話せない子、少しだけの子どもが35%、家庭での使用語は下記表I、IIに見るように3分の2が英語で日本語は4分の1、その他である⁽²⁾。

このように、ここは多言語、多文化民族学校であり、日本語使用の子どもは全体の3分の1である。入学希望者が多く、この年は約

Ethnic Diversity	表 I
AA (African American)	6%
C (Chinese)	5%
F (Filipino)	1%
J (Japanese)	35%
K (Korean)	1%
L (Latino)	3%
NA (Native American)	1%
ON (Other Non-White)	24%
OW (Other White)	17%
DS (Declined to State)	8%

Home Language	表 II
Chinese	1%
English	64%
Japanese	25%
Other	3%
Spanish	2%
Unknown	5%

4倍の狭き門で、面接入試が行われている。

入学ではまず英語が出来ない日本人や日系人の子ども、兄弟の在学を基準に優先入学させている。公立学校である以上、学力によって子どもを差別しないという。しかし、表III、IVにみるように、他の公立学校よりおおむね学力の平均値が高いという調査結果が出ている。⁽³⁾

教育方針は以下のようである。

1. 英語でのコアカリキュラムの指導を中心としながら1日1時間の日本語による授業をする。
2. 多様な文化背景を踏まえつつ、日本の文化や地域コミュニティー、日系アメリカ人の歴史に対する理解を深める。
3. 次世代への懸け橋となるべく、日本語と日本文化の継承と発展に努める。
4. すべての児童が、自分に真に誇りを持ち、他者を敬うことができるような土壌を作る。
5. 日本語を母国語とする指導員、「せんせ

い」により日本語と文化的行事に触れることができる。

6. 父母、その他保護者など、多くの協力者⁽⁴⁾が不可欠である。

III. 幼・小学校の教育課程

1) キンダーガルテンのプログラム

1) “kindergarten” すなわち、キンダーガルテン（子どもの園ドイツ語と同じ）と称するクラスでは4歳9ヶ月から5歳9ヶ月の子どもたちが入学してくる。

その上は1年生から小学校の課程で、5年生が卒業学年である。大半の子どもは就学前のプレスクールを経ており、キンダーガルテンとはいうが、これは幼児保育と学校教育の中間に位置している。

教育の展開は英語が基本である。保育・教育内容は下記に見るように多岐にわたっており、小学校の課程に繋がるように設定されている。教育委員会発行の資料から要点のみ挙げたい。⁽⁵⁾

Kindergarten (キンダーガルテン)

読み Reading

1.0 組織的な語彙の発達、単語分析、流暢さ
Word Analysis, Fluency, and Systematic Vocabulary Development

- 文の読解と単語認識
- 語彙と概念の発達

2.0 読解力 Reading Comprehension

3.0 読解反応と分析

書くこと Writing

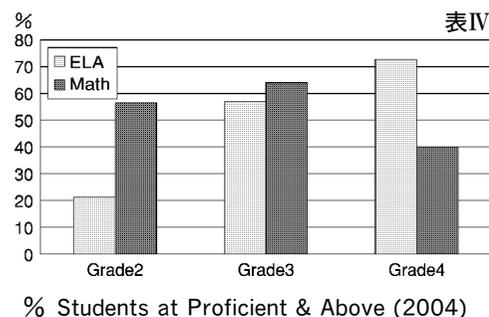
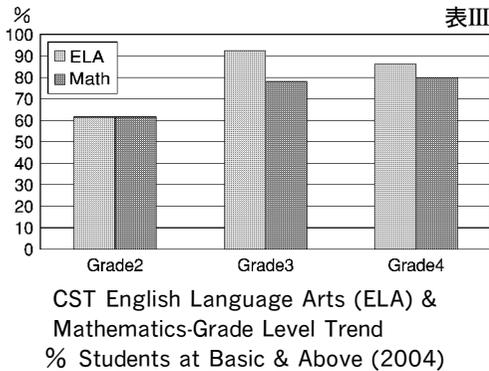
書き言葉と話し言葉の協定 Written and Oral English Language Conventions

聞くことと話すこと Listening and Speaking

数感覚 Number Sense

代数と機能 Algebra and Functions

測定と幾何学 Measurement and Geometry



統計, データ分析および見込 Data Analysis

and Probability

物理学 Physical Sciences

ライフ・サイエンス Life Sciences

地球科学 Earth Science

調査と実験 Investigation and Experimentation

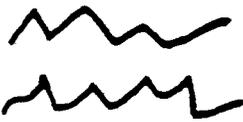
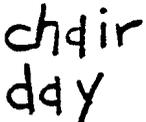
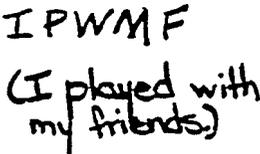
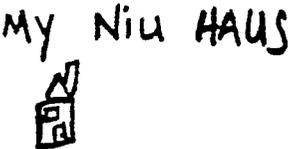
tation

2) さて, 上記は州の規定によるキンダーガルテンの教科課程であるが, 教師たちはこうした細分化されたものより, キンダーガルテンの役割を小学校教育への橋渡しと位置付け, 実際は基本的な生活習慣, 社会性(協調性), 他者とのコミュニケーションの総合的な力の育成をより重視している。

EVOLUTION OF A CHILD'S WRITING

図 I

(Drawings are an important part of a child's writing and often a child will repeat the theme of his writing or drawing on subsequent pages)

 <p>Scribble Stage (Starting point any place on the page)</p>	 <p>Scribble (Left to right progression)</p>	 <p>Mock Letters (Can be personal or conventional)</p>
 <p>Letter Strings (Left to right and progressively downward)</p>	 <p>Groups of letters with space in between to resemble words</p>	 <p>Picture Labeling (Matching beginning letter to sound.)</p>
 <p>Copies Environmental Print</p>	 <p>Uses first letter of a word to represent the word</p>	 <p>Uses beginning letter and ending letter to represent the word</p>
 <p>Hears medial sounds (Writes word with beginning, medial and ending letters)</p>	 <p>Phrase writing</p>	 <p>Whole sentence writing</p>

集団生活の基本として、生活日課と遊び、日米の文化・スポーツ、野外活動、季節の行事などのカリキュラム化とその実施である。

就学前のこの年齢の児童には具体的、実際的な体験を通して五感に働きかける教育的遊びを多くし、ゆとりを持った教育内容が望ましいと考えているからである。

図Ⅰにみるような、興味ある子どもの字を挙げたプリントが学校から保護者向けに配布されている。これは、象形から文字への発展と習得、そして文章作成へのプロセスを一覧にしたものである。これは家庭用の分厚い説明書⁽⁶⁾の一部分に載っていたものである。

3) この学校の日本語や日本文化の授業は JBBP West, “Japanese ~ Adventures in Nihongo ~ Japanese Curriculum Newsletter” October 2004”等に詳しい。

キンダーガルテンでは9月から11月まではあいうえお50音の発音、指示語、挨拶、言葉、身体の部分の名称、簡単な形容詞の練習があり、秋をテーマにした自然観察や運動会などの取り組みがある。

これが12月では「て、に、を、は」の使用

法、1～10までの数字覚えて書けること、自然観察として動植物の世話など。

1月では半濁音と濁音の発音練習、自然観察では雨と雪の学習。カルタやすごろく、福笑い、こま回しの練習や祝う会の開催である。

一方、週に一度のパソコン授業ではブラッド・ルシドー氏製作の日本語ソフトによって「あいうえお」の書き方順の練習している。

年度の日本文化活動や行事は、運動会、文化の日、敬老の日、お正月、ひな祭り、桜祭り、子どもの日等である。一方、アメリカの行事にはクリスマス、イースター、ハロウィーンなどのほか、M. L. キング牧師の記念日もある。

2) 小学校のプログラム (Grade One)

- ① 時間割の一覧を見ると表Vのようになっている⁽⁷⁾。
- ② 1年生 (Grade One) の教育課程でキンダーガルテンと教科項目は同じであるが、小学1年生のみの教科内容を上げておきたい⁽⁸⁾。

表V

Room 5's Schedule	8:00-8:40	8:40-9:40	9:55-10:35	10:35-11:10	11:55-12:50	12:50-1:15	1:15-1:45
Monday	Opening Routines Reading	Japanese	Reading	Word Work	Math	Writing	Social Studies Science
Tuesday	Opening Routines Reading	Japanese	Reading Music	Word Work	Math	Writing	Social Studies Science
Wednesday	Opening Routines Reading	Japanese	Reading	Word Work	Math P.E.	Writing	Social Studies Science
Thursday	Opening Routines Reading	Japanese	Reading	Word Work	Math	Writing	Social Studies Science
Friday	Opening Routines Reading	Japanese	Reading	Word Work	Math Library	Writing	Social Studies Science

読み Reading

1.0 組織的な語彙の発達, 単語分析, 流暢さ
Word Analysis, Fluency, and Systematic
Vocabulary Development

読書の基本的特徴の理解, 文字パターンの選
択, 音声, 分節法, 単語の使用, 活字に対す
る発想, 音素に対する認識
文の読解と単語認識, 語彙と概念の発達

読解力 Reading Comprehension

適切な読み物の理解, 学年によって, 規則的
な学校読書に加えて, 4年生までに, レベル
に適切な物語および解説的な題材 (例えば,
古典的, 現代文学, 雑誌, 新聞, または, オ
ンライン情報)を含めて, 年間50万単語を読
む。1年生では, このゴールを目指し, 読解
力の進歩をし始める。

読解反応と分析 Literary Response and Analysis

テキストと文語的用語の構造, 要素(テーマ,
話の筋, 設定, 登場人物)の識別

書くこと Writing

明瞭で首尾一貫した文, 書くプロセス

聞くことと話すこと Listening and Speak- ing

コミュニケーションによる応答。適切な語法,
標準のアメリカ英語を聞く, 話す

自然科学

1年生の終了までに位取り, 10代の概念を理
解と使用。数の足し算, 引き算, 数の情報の
記述, 単純な問題を解く

数感覚 Number Sense

1, 10, 100の位の使用と問題を解く

測定と幾何学 Measurement and Geome- try

対象物の測定と比較

幾何学的図形の識別

統計, データ分析および見込み Statistics, Data Analysis, and Probability

対象物の整理, 数, 形, 大きさ, リズムある

いは色によるパターン化

数学的な推測 Mathematical Reasoning

問題の設定, 問題の解答, 推論, 1つの問題
と別の問題の関係

物理学 Physical Sciences

固体, 液体, 気体の理解。物質の特性の変化
変わることを知っている。

ライフ・サイエンス Life Sciences

2. 植物と動物の概念の理解を理解, 種の環
境と繁栄

地球科学 Earth Sciences

3. 天候の観察, 測定, 記録, 太陽と土地,
空気および水の関係の理解

調査と実験 Investigations and Experi- mentation

現象の新しい観察を行なう。

IV. 保護者, 地域, 参加型の教育

カリフォルニア州教育庁発行の保護者向け
の“Student and parent/guardian Hand-
book”には次に見るような, 学校の方針と規
定を整備して保護者に通知しているのであ
(9)る。

“Student and parent/guardian Handbook” 目次

- I. 教育委員会 (Board of Education)
- II. 使命記述書 (ミッションステイトメン
ト) および校長の核となる信条及び目
的 (SFUSD Mission Statement and
Superintendent’s Core Beliefs &
Goals)
- III. 生徒及び Parent/Guardian の手引の
オリエンテーション (Student and
Parent/Guardian Handbook Ori-
entation)
- IV. 中央行政 (Central Administration
Directory)
- V. 学校カレンダー (School Calendar)

- VI. 国家や中央政府方針 (State and/or Federal Policies)
- VII. サンフランシスコの統一された学区方針
- VIII. アカデミックなガイドライン
- IX. 出席のガイドライン
- X. 訓練的なガイドライン
- XI. 留年規則および手続き
- XII. 退学規則および手続き
- XIII. 家庭
- XIV. 学校健康プログラム

2) こうした JBBP の方針を理解した保護者は学校やクラスに積極的に参加し、協力している。それは行事や PTA の会合のみならず、ローテーションで 1 日二人ずつの協力体制を組んでクラスへの参加・援助を行っているのである。

学校やクラスへの参加によって、他の子どもや保護者との交流し、相互理解の機会となっている。また、教師との面談の機会が増え、学校と家庭、教師と親が親密につながることになる。こうした親・保護者の積極的な参加システムは日本の学校との間にかなりのギャップがある。

学校からの宿題が多く、出来た者には“Super Student”として賞状が与えられる。その他、家庭用に“Helping Your Child”⁽⁹⁾という教育内容に関する指導書も配布されている。

学習においても保護者と密接なつながりを持っているのである。

V. 多文化教育と課題

1) JBBP における 1 年生用日本語の目標は次のようである。

日本語および日本文化の学習を通し、日本語での生活経験を豊かにする。幼稚園で勉強したことを定着させ、更なる日本語力の向上

を図りながら、楽しい学校生活を送ることができるようにする。

その他のカリキュラムとして、自然観察、歌(季節、動物、五十音、数字、色、自然、行事に関する歌)、話(世界、日本の童話、民話、昔話、創作童話など)、ゲーム(日本語学習につながるもの)、アート(月々のカレンダー製作、パペット作り、折り紙、日本的なカードの作成、習字など)、養老施設訪問、桜まつりなど、日本人コミュニティへの参加などがある。

2) 2005 年 9 月から来年 3 月までの“FIELD TRIPS”(野外学習)のプログラム表 VI を見ると、まさに多文化教育の実態を見て取れる。これに先にあげた学校やクラス内の行事が入っている。

September 22	Aquarium of the Bay (Pier 39 & Sea Lions)
October 6	Undokai
October 14	Pumpkin Patch (Clancy's Pumpkin Patch)
October ?	Halloween Parade (walking)
November 4	Ortega Library (walking)
November 9	Miwok Museum (Room 4)
November 15	Miwok Museum (Room 5)
December ?	Chabot Space and Science Center (Planetarium)
January ?	Legion of Honor (Cinderella)
January ?	Randall Museum (animal Presentation)
February ?	Academy of Science AIM (Adventure In Music) Concerts during the year
February ?	Davies Symphony Hall
March 10	Lloyd Lake/Cherry Blossom Viewing (Hanami)
March 14	Wizard of Oz (Palace of Fine Art)
April ?	Slide Ranch
May	Community Field Trip to JCCNC (Children's Day) SF Zoo Meeting Pen Pals at Sunset Elementary School

3) さて全体的な考察になるが、JBBPの積極面として保護者の評価は、小規模校のため、低学年と高学年児童の密な交流があること、教師の行き届いた指導、そして何よりもこの学校の特色である日本語と文化のカリキュラム化である。

反面、校舎の狭隘化と日本人教師の少なさは最も改善すべき実態である。

ここのキンダーガルテンでは、月例から来る発達差が大きい反面、日課のスケジュールが過密である。実際、6時間の授業はこの年齢ではオーバーワークだ。だが、サンフランシスコ市教育当局は就労父母の便宜からキンダーガルテンクラスも他の学年と同様に6時間授業にしている。また、それぞれの家庭使用の語学力によって、英語と日本語の両語習得は学習進度の差を広げていることも事実である。

高学年の4、5年生へと進むと、州や市の必修課程に沿った英語の学習内容も高度で多量のため、ゆとりのある日本語学習が困難になってきている。一日1時間程度の少なさはこの学校の目的からいうと論外である。

だが、保護者は上記に取り上げたような多様な家庭用の資料配布物によって教育方針や情報を把握している。また、日常的な学校参加によって人的な交流があり、全体としてはこの学校の有り様を歓迎し、賛同し、協力している。

困難点の解決策は、当面、この学校の目的に向けてコラボレートする教師・スタッフ集団と保護者の懸命な努力によって徐々に手が打たれているというのが実態である。

さいごに — 研究の方向 —

今後の研究としては、“After School”(学童保育)も取り上げたい。授業終了後に約3分の1の子どもが送迎バスでここに通り、午後後の大半の生活を過ごしているので、これは

重要な役割を果たしている。

また、F. フレーベルが構想した「媒介学校⁽¹¹⁾」とJBBPとを比較検討したい。これは、キンダーガルテンと学習学校の間位置していて、直観教育から認識の教育への内容を記したものである。

そして何よりも、このJBBPのユニークな学校の存続について危ぶまれているが、この州教育委員会側の政策についても研究を広げたいと考えている。

[注]

- (1) ラウ法は“non-English-speaking-students”への教育保障の規程である。
- (2) これは校長のMrs. Jessica Bogner, による報告“School Description Japanese Bilingual Bicultural Program”である。
- (3) 同上の資料による“Student Achievement”のデータである。
- (4) JBBP West, “Japanese Bilingual Bicultural Program”
- (5) San Francisco Unified School District, “Kindergarten”
- (6) San Francisco Unified School District “Grade One”
- (7) これは、Grade Oneのクラスで配布されたものである。
- (8) “San Francisco Unified School District” Enrollment Guide, 2004, 2005/2006 Enrollment Period”
- (9) “Helping Your Child” これは合衆国教育局発行で、5歳用の“Succeed in school”(改訂版1997)と6歳用の“Become a Reader”(改訂版2002)である。
- (10) JBBP West, “Back to School Night” September 16, 2004
- (11) F. フレーベル, 岩崎次男訳「幼児教育論」1982 これはフレーベルの1852年の書簡である。原語は“Die Vermittlungsschule”。

[参考文献]

- ① JBBP West, “JBBP West STAFF Calendar of Events” 2004-2005
- ② Bogner (Site Administrator), “School Description Japanese Bilingual Bicultural Program”

- ③ Gaila Uehara/Aileen Mizokami, (Kinji Kubota による和訳)
“JAPANESE BILINGUAL/BICULTURAL PROGRAM” 1978
- ④ San Francisco Unified School District,
“Student and Parent/Guardian Handbook
2004-2005” 2004
- ⑤ “同上 2005-2006” 2005
- ⑥ San Francisco Unified School District,
“Kindergarten”
- ⑦ JBBP West, “Japanese ~Adventures in
Nihongo~” Japanese Curriculum News-
letter “October 2004” (和訳あり, 以下⑦⑧
⑨も同様に和訳あり)
- ⑧ JBBP West 同上, May 2005
- ⑨ JBBP West, “Japanese Bilingual Bicultural
Program”
- ⑩ JBBP West, “Japanese Bilingual Bicultural
Program Kindergarten Japanese Language
and Culture Plan”
- ⑪ JBBP West, “Back to School Night” Sep-
tember 16, 2004
- ⑫ San Francisco Unified School District
“Enrollment Guide, 2005/2006 Enrollment
Period”
- ⑬ 酒井玲子, 「サンフランシスコ市バイリンガ
ル・バイカルチュラルの学校 — キンダー
ガルテンクラスの参観記 —」 全国保育問
題研究協議会編 『季刊 保育問題研究』 213
号 新読書社 2005.6
- ⑭ F. フレーベル, 岩崎次男訳『幼児教育論』
1978 明治図書

[Abstract]

Consideration of the Japanese Bilingual
Bicultural Program (JBBP):
A Case Study of the San Francisco School District

Reiko SAKAI

International schools have been increasing recently, e.g. Korean schools and other international schools. These schools in Japan are not specified in Article 1 of the School Education Law but are free schools which are not approved. This paper examines the JBBP program in the San Francisco School District, which has a curriculum based on the cultures of two countries. The following items were investigated and examined. 1) How and why the JBBP was started in 1973 as a result of a petition movement by Japanese-Americans who experienced the relocation camps in the U.S. during the Second World War. 2) How the school's curriculum incorporates both Japanese and English curriculum, considering the needs of the staff and the students and hoping to foster lifelong education. 3) The curriculum and other activities of students in kindergarten and first grade. 4) How the school fosters participation by the parents of students and cooperates with other local area schools.